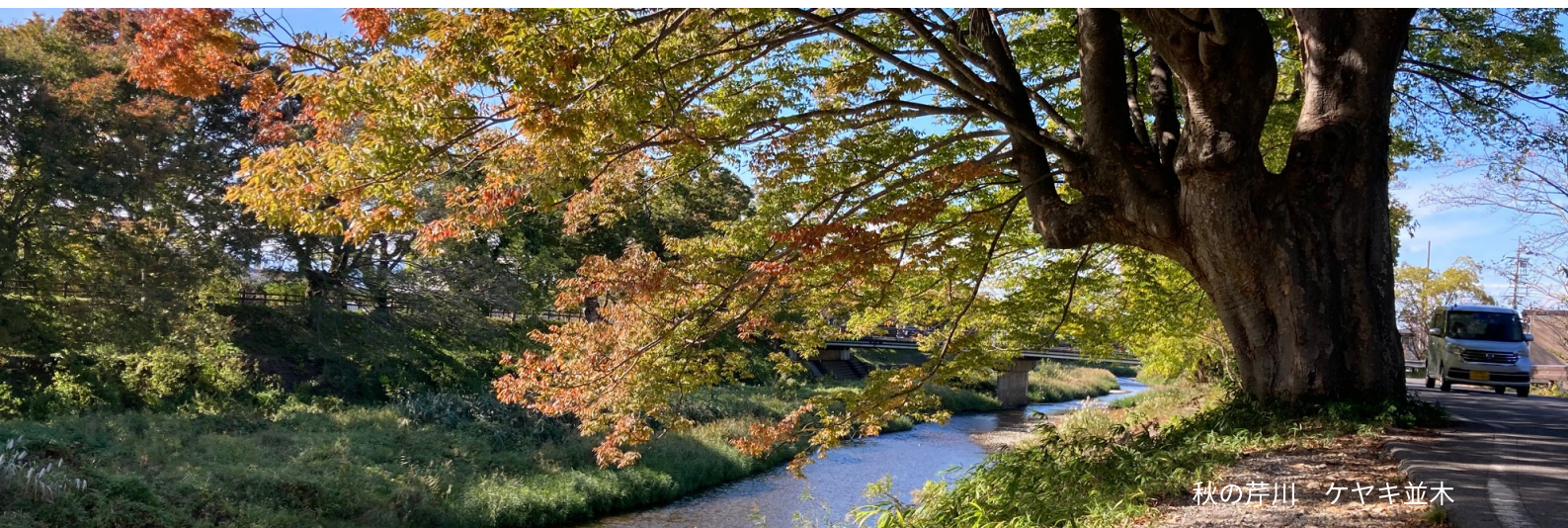




# きらっと彦根

彦根の魅力★再発見



秋の芹川 ケヤキ並木

## 文化遺産を活かしたまちづくり

### 失われゆく歴史的な建物

城下町彦根は400年の歴史があります。幸い戦災にも遭わず大都会に比べると大きな開発の波にさらされることもありませんでした。しかし、せっかく残された歴史的な建物や街並みも、その価値や魅力を評価されずに失われていくことも多くあります。

城下町に残る足軽組屋敷は、上級武士の屋敷や贅を凝らした立派な商家とは違い、その価値が評価されるのには時間がかかりました。

### 足軽組屋敷・辻番所のトラスト運動

2007年芹橋地区に残る「足軽組屋敷・辻番所」の売却の意向が伝わりました。その後市民による買取を目指したトラスト運動がきっかけで、彦根市による買取と文化財指定、更に解体修理が実現しました。現在「辻番所・旧磯島家住宅」は地元有志の「彦根辻番所の会」で休日の一般公開の運営がされ、まちのシンボリックな建物になっています。

### 文化遺産を活かしたまちづくりへ

「辻番所・旧磯島家住宅」がみごとに蘇ったことで、地元でも「文化遺産を活かしたまちづくり」の機運が高まってきました。江戸時代からの路地の町割りがあるまま残り、足軽組屋敷も現存する地域ですが、高齢化し空き家が増え、防災などの問題も多く抱えています。この歴史的な文化遺産を活かしつつ、安心して気持ちよく暮らせる魅力的なまちを目指すべく、2017年「芹橋二丁目まちづくり憲章」が制定されました。

まちづくり憲章をもとに、防災や様々なコミュニティ活動、空き家問題の取り組みが始まりました。自治会まちづくり部会（当時）にて、大家さんと移住希望者との橋渡しを行い地域が暖かく迎え入れる体制が整えられました。小さなお店を始める人も現れ、少しずつこのまちの魅力を感じて移り住む人も増えてきています。

### まちの魅力を発信する「バーチャル資料館」

NPO法人彦根景観フォーラムでは、芹橋二丁目地区の「文化遺産を活かしたまちづくり」を住民の皆さんと取り組み支援してきました。「まちづくり憲章」の検討や「防災」のワークショップなどがその一例です。

今年度は、さらにこのまちの魅力を発信すべく、足軽組屋敷を動画で紹介した「バーチャル資料館」の制作を企画し、クラウドファンディングによりその制作費の支援を募りました。おかげさまで多くの方々から目標額の200%を超えるご支援ををいただき、これを実現することができました。改めてご支援いただいた皆さんに、感謝申し上げます。また、このプロジェクトを新聞各社やラジオ、テレビなどでも取り上げていただき、予想以上のPR効果があったのではないかと思います。

「バーチャル資料館」では、7本の足軽組屋敷紹介動画と、「辻番所・旧磯島家住宅」の3Dウォークスルー映像が公開されています。保存修理された建物、お店やギャラリーとして活用されている建物など様々な足軽組屋敷が紹介され、それぞれに関わる人々の思いが語られています。

この「バーチャル資料館」をきっかけに、足軽組屋敷を知っていただき、多くの方にこの歴史的なまちの魅力を感じていただきたいと思います。また、世界遺産登録に向けて、城下町の魅力発信の一助になればと願っています。

（笠原啓史）



バーチャル資料館は、このQRコードから



## 上田道三 彦根の歴史風景を描く



旧足軽屋敷の自邸前の道三（昭和47年）



上田道三筆 足軽屋敷の家並み 中辻付近／彦根市文化財課所蔵  
（中辻を西向く、左右が旧芦橋十三丁目の通り）

昭和の時代、彦根城や彦根の古い町並みを描き続けた画家、上田道三（うえだみちそう）（1908-84）。彼の作品は、没後約40年を経た今なお親しまれています。

現在の彦根市で生まれた道三は、風景画家、不染鉄（ふせんてつ）の内弟子として奈良で2年ほどを過ごし、後、京都市立絵画専門学校に入って改めて画を学び、同校で教鞭をとっていた中村大三郎（なかむらだいざぶろう）の画塾に入りました。官展へ出品して入選するなど、充実した日々を送りましたが、終戦後の昭和21年、彦根へ戻ることを決意、一家で引っ越しました。

帰郷して最初の10年ほどは彦根城のスケッチをする程度でしたが、昭和30年、絵図や記録類を丹念に調べ、江戸時代当時の様子を復元的に描いた大作「彦根城原形全図」第1号を完成させ、評判を呼びました。

道三の関心は次第に城下へも向き、武家屋敷や古民家も描きはじめました。時には外観にとどまらず内部構造も描き記し、説明文を画中に入れるなどしています。この画は、最終的に総延長150メートルほどに及ぶ連作と

なりました。古い屋敷があると聞くと出かけていって描き、屋敷の当主と談義をしていたといいます。特に熱心に描き始めたのは昭和32年頃で、その年道三は、それまで住んでいた中荻から旧足軽屋敷の一軒（旧芦橋十三丁目）に引っ越したことが契機となったと思われます。

道三が古い建物や町並みを描き続けた背景には、彦根やその周辺の町が急速に変わっていくことへの嘆き、変わる前の姿を記録に留めなければならないという強い思いがありました。歴史なども丹念に調べて描いた画を、道三は自ら「記録画」と称し、「後世に残るのは極々限られた人と作品のみだ。でも記録画は残る。」と語っていたといいます。

道三の言う「記録画」は、一定の史実を示すものですが、写真ではなく、あくまでも道三の目と手を通して表された絵です。その絵は、見る者にぬくもりを感じさせ、古き彦根に対する愛着を増幅させます。町づくりの原動力ともなり得る魅力を備え、今後も注目され続けることでしょう。

（彦根城博物館 学芸員 高木文恵）

### さとの宿だより 花々のような朝食

多賀さとの宿一圓屋敷は4度目の秋を迎えました。この秋、お客さまに出される朝食は、10月の寒露あたりから、焼き野菜から蒸し野菜に代わります。添えられる手作りのピーマン趣味噌は1年を通して大人気です。この秋も多賀産の野菜を使い、10種類以上のメニューがダイニングに並びます。

朝食は、多賀大社駅前通りにある欧風お惣菜の店「梵」の高橋由紀子さんが作ります。彼女の作る朝食で、いつも秘かに感動することがあります。それは、一つ一つのお料理が美しい花々のように盛られることです。

この日の一皿であるサラダには、紫キャベツとコリンキー、ルッコラなどのミックスリーフと蒸し鶏が用意されました。そこに、手作りのマヨネーズとニンジン葉のジェノベーゼがかけられ、朝に収穫した輪切りの花柚子が添えられました。

使われるお皿は、一圓屋敷伝来の染付の骨董。今日もお客さまの「わあ♡」という歓声から朝食が始まります。（江竜美子）



多賀さとの宿 一圓屋敷

<https://www.ichienyashiki.jp/>

〒522-0317 滋賀県犬上郡多賀町一円149

Tel. 050-3319-1050 info@ichienyashiki.jp